

【A 会場】

日本語学と形式意味論をつなげる ー GrammarXiv データベースの活用の可能性ー

田中英理（大阪大学）
水谷謙太（愛知県立大学）
井原駿（津田塾大学）
窪田悠介（国立国語研究所）

日本語学と形式意味論は、研究伝統や方法論の違いのため十分な研究交流がなされておらず、両分野においてこれまで蓄積されてきた知見が相互に活用されながら研究が行われているとは言い難い。本パネルセッションの目的は、「話者の知識状態」を参照するとされる、ある種の談話的機能を持つ現象の分析をめぐって、この状況を打破するための試行錯誤と提言を行う。具体的には、言語学の仮説、一般化、文献、データを容易に検索可能な形で可視化することを目的に開発されたデータベースである GrammarXiv DB の試作版のデモを交えて、分野をまたいだ研究の可視化の可能性を検討する。

導入と背景の説明を行う発表1のあと、具体的なケーススタディをもとに分野間の交流や研究の可視化に関する課題を論じる発表を2件行う。発表2では、発表者らが現在まで行ってきた、日本語の最上級修飾語「少なくとも」の形態意味論的 (morpho-semantic) な特性とその語用論的効果についての研究を紹介する。本発表では、まずその成果を概観しつつ、一連の研究の背後にある形式意味論的関心や問題意識を共有する。その上で、研究の過程で日本語学の記述的研究を参照しようとした際に直面した課題について議論する。発表3では、理論言語学研究者である発表者が日本語の記述研究者と共同で行っている、対比のハに関する研究を進める中で直面した戸惑いや課題について報告する。具体的には、日本語学における先行研究が意味的な一般化に関する概念ではなく主に品詞分類や個別の語彙項目によって関連付けられている点、また類似する意味的概念に対して論者独自の用語が用いられがちである点が隣接分野からの新規参入にとって障壁となりうる、ということ論じる。

【B 会場】

方言におけるノダ相当形式の対照研究

野田春美（神戸学院大学）

江口 正（福岡大学）

田附敏尚（神戸松蔭大学）

野間純平（島根大学）

標準語のノダに相当する方言形式について、共通の調査票を用いた調査結果に基づいて、方言間の異同を論じる。標準語のノダは準体助詞のノとコピュラのダから成る。本パネルセッションでは、ノダ相当形式にコピュラが現れにくい方言として福岡県福岡市方言、コピュラを含む形と含まない形のノダ相当形式がある方言として青森県五所川原市方言、準体助詞のない方言として山梨県早川町奈良田方言・島根県出雲市平田方言を取り上げる。

①提示用法と把握用法については、準体助詞をもつ方言のノダ相当形式では、基本的に「把握用法におけるコピュラの必須性」が見られた。ただし、コピュラではなく終助詞が必須である方言や、提示用法でコピュラを含まない形が使えない場合がある方言もある。②スコープを表す文（例：太郎が来るんじゃないよ。（花子が来るんだよ。））では、多くの方言でノダ相当形式が使われる。③標準語でノダ文の典型とされやすい関係づけ・提示の平叙文（例：明日は来ないよ。ちょっと用事があるんだ。）ではノダ相当形式も使われやすい。非関係づけではノダ相当形式の使用は項目による。既定性を明示する必要性が高いと考えられる教示的で非即時実行の命令（赤いライトが点いたら、このスイッチを押すんだ）、想起（例：あ、思い出した。今日は花子が来るんだ）、後悔（例：こんなことなら、早く出発するんだだった。）などでは、ノダ相当形式が使われる方言が多い。一方、即時実行の命令（例：何をしている。早くスイッチを押すんだ。）や、意志の自己確認（例：（独り言で）今日は絶対徹夜するんだ。）では、ノダ相当形式は使われにくい。これらは、そもそも標準語でノダがどの程度使われるのかという疑問が生じる。④既定性を表すというノダの性質は、方言のノダ相当形式にも基本的に共通している。⑤そのほか、名詞述語文でノダ相当形式が現れにくい方言があるといった傾向も見られた。